

茶ぐわ〜ゆんたく

お茶を飲みながら、
ぎのわんの歴史を
のぞいてみませんか？



移り変わる街並み

〜戦後80年を迎えて⑥〜

今月号は今年の干支である「馬(午)」にちなんだ、移り変わる街並みについてご紹介します。

馬は沖縄では古くから人々の生活に寄り添う身近な家畜でした。戦前の宜野湾村でも同様で、馬は荷物の運搬、畑の耕作、製糖業などの様々な場面で活躍するため、役畜として生涯に亘り大切にされました。

写真①は枝振りが美しいと有名だった



▲写真① 大山ヒラマーチャーと写真右下に写る連絡客馬車(大山) 1917(大正6)年頃



▲写真② 乗馬を楽しむ人達の様子(普天間) 1958(昭和33)年頃

「大山ヒラマーチャー」という平松の写真です。この一帯は、道行く人々に安らぎを与える休憩場となっていました。写真の右下には、県道(現国道58号)が通っており、道には連絡客馬車(客馬車)が停車しています。客馬車は、客席が6名の乗合馬車で、軽便鉄道の大山駅構内で降りた客を乗せて、大山と普天間を往復していました。頻度は1日に2〜3回行き来する程度でしたが、普天間権現(現普天満宮)への参拝を目的とした正月や拝み行事の日は、特に利用客が多かったそうです。客馬車は人を目的地まで運んでくれる存在として、昭和初期頃まで活躍していました。

1960(昭和35)年頃になると、普天間解放地(現すざん通り一帯)では基地で働く米兵相手に貸馬業が盛んになりました(写真②)。彼らの週末や給料



▲写真③ 大山ヒラマーチャーがあった辺りの現在の様子 2026(令和8)年1月

問 市立博物館 ☎870-9317

日になると、長田や上原、遠くは中城村から馬を連れた人達が集まり、日頃荷馬車として使用している馬を貸し出して収入を得ていました。しかし、人通りの多い街中で馬を走らせるなど、米兵らによる危険な行為でよく事故も起こりました。ともあれ、戦後の貧しい時代でも、馬は人々の生活の助けとなる重要な存在でした。

写真③は、かつて大山ヒラマーチャーがあった辺りの今の様子です。客馬車が走っていた道は、車通りの多い道へと姿が変わりました。現代において、馬と人との関わりは希薄になりましたが、かつては客馬車に揺られながら移動する、ゆつくりとした時間の流れが広がっていたのしょう。

はくぶつかん情報

博物館市民講座受講生募集！

企画展関連講座

【語やびら、イガルシマ】

〜じのーんどうむら〜

字宜野湾の戦前から戦後の様子や暮らしなどについて、郷友会の方々にお話しいただきます。

▼日時 3月1日(日)

14時〜16時

▼場所 市立博物館2階 研究室

▼講師 字宜野湾郷友会

▼定員 40人

▼参加費 無料

▼申込期間 2月8日(日) 9時〜



企画展 開催中!!

問 市立博物館 ☎870-9317

※休館日…火曜日・祝日

※開館…9時〜17時
(最終入館は16時半まで)